

葦北にも「水俣病の恐怖」

『汚水の排水やめて』

葦北
町長ら 新日窒工場に陳情

「水俣病の影響により葦北郡内でも最近ネコがどんどん死に、死魚や仮死状態の浮遊魚が増え、漁民はもろろん仲買商の魚の売れ行きがガク減り、郡民の不安はつのるいつぱうなので、善処してほしい。」

と十八日午前十一時吉田葦北町長はじめ同郡各町村長、山石、高木、田中漁業調整委員会葦北沿岸漁業振興対策協議会の代表十四人は新日窒水俣工場を訪れた。一行は西田工場長に、

①水俣川流域に放出されている排水の中止②汚濁水の浄化設備

の急設③自開港と八幡沿岸にある汚物の除去。

の三項目について陳情した。

これに対し西田工場長は「浄化措置はすでに着手しており、原因が工場汚濁水によるものではないとは断言できないが、八幡の排水の場合、熊大側の実験では固所の魚をネコに与えたが死病しなかった。また工場では昭和十二年からカーバイド残さいのうずすみを海に放出、その後

燐酸、カーバイド密閉桶など水俣病には関係のない新たな仕事をはじめたわけで、魚が八幡沿岸と水俣川河口で死ぬのは同病とは関係のないことも工場独自の実験ではつきり証明している。現在工場としては海への排出物を減らすように努力中であり、また新たに八幡にできる耐火レンガの原料をつくる新日本科学のマクネスアクリンカー工場の出現によって同工場は海水を多量に工場内に吸収するので新日窒からの排水も現在の四分

の一に減る」と答えた。さらに陳情団側から「原因は工場にはない」と償うというがそれならなぜ水俣漁民に三千五百万円の補償金を支払ったのか。もし工場排水が原因と確認が出た場合は責任を持つか」などの質問が出された。

これに対し工場長は「原因が工場にあると確定した場合は善処策を講じ、今後不知火海の実情調査など漁民の現状を考えて今後の要望にお答えするとともに工場としても不安を一掃するため、最善の努力を惜しまない」と答えた。